

"This we know: the earth does not belong to man; man belongs to the earth."
Chief Seattle

「私たちはこう信じています。大地は人間のものではない、人間が大地のものなのだ」と インディアン首長シアトル

今から150年ほど前、合衆国大統領から土地を割譲するよう要請されたインディアンの首長シアトルが、それに答えて送った書簡の一部です。コロンブスによってアメリカ大陸が発見されると、高度な文明を持ったヨーロッパの白人が続々と渡来して開拓を進めました。しかし、この大陸には先住民がいて、自然のままの生活をしていたのです。先住民は文明の力に負けて次々と制圧され、西へ追われていきました。

太平洋に面しアメリカの最西北に位置するワシントン州の港町シアトルに、最初の移住者が現れたのは1851年、南北戦争の始まる10年ほど前のことでした。それ以来この港は木材の運搬に使われるようになり、町は木材取り引きの小中心地として発展しました。しかしそれと同時に、先住民であるインディアンは土地を追われることになったのです。この地のインディアンの首長であったシアトルは1855年、合衆国への土地割譲条約に調印しますが、それに先立って54年に第14代大統領フランクリン・ピアースに手紙を送り、白人によって自然の環境が破壊されるのを恐れる気持ちを訴えました。そこには当時すでに今日の環境破壊を予見していたような、鋭い洞察力が見られます。以下、その内容の一部をご紹介します。なお、この町は友好的に割譲に応じた首長の名を記念して、シアトルと名づけられました。



「この大地はどことも我が民族にとっては神聖です... 私たちは大地の一部であり、大地は私たちの一部であります。香しい花は私たちの姉妹で、鹿や馬や大ワシは兄弟です。

もし私たちが土地を売るとしたら、あなた方は土地が神聖なものであることを覚えて子どもたちにそのことを伝え、澄んだ湖面に映るおぼろな影の一つ一つが、我が民族の歴史におけるさまざまな事件や事象を物語っていることを教えなければなりません。

白人には私たちの風習が理解できないことはわかっています。白人は夜中にやってきて土地から必要なものをすべて持ち去るよそ者だからです。大地は白人にとって兄弟ではなく敵であって、征服すればさらに先へ進むだけです... その旺盛な食欲は大地をむさぼりつくし、あとには砂漠しか残しません。

空気はインディアンにとって貴重なものです。万物が同じ空気を呼吸しているからです。動物も樹木も人間も、すべて一つの空気を分け合っています。白人は自分の吸う空気に無頓着のように思われます。死にかけた人のように、悪臭に無感覚になっているのです。

もしバッファローがごとごとく殺害され、野生の馬が飼い慣らされて森の隅々にまで人間の匂いがたちこめ、実り豊かな丘の景色が電線でぶちこわされたら、いったいどうなるでしょうか。私たちには想像もつきません。茂みはどこにあるでしょうか。ありはしません。ワシはどこにいるでしょうか。どこにもいなくなってしまうでしょう...」